

アウグスト・シュマルゾウ (August Schmarsow.1853-1936) の『芸術学の基礎概念(Grundbegriffe der Kunstwissenschaft)』(1905) に盛られた美学思想の「哲学的源泉」を見極めることが、本発表の目的である。近年、建築論の文脈で彼の空間論に言及する論考をよく目にするが、歴史を辿りその哲学的源泉にさかのぼる先行研究を、発表者は寡聞にして知らない。

『基礎概念』冒頭の八つの章は、「運動(Bewegung)」概念によるシンメトリー、プロポーション、リズムなど(つまり基礎概念)の芸術学的考察である。だがシュマルゾウにおいて、「芸術学的」分析がそのまま「カント的」だったかと言うと、そうとは言い切れない。

総じて「芸術学 (Kunstwissenschaft)」が「カント的」であり続けたことに疑義はない。先陣を切った C.フィードラーがそうだし(「人間の機能は自分で形成した結果のみを受容する」(『芸術的活動の起源』、1887)、約半世紀後の E.パノフスキーの「現象意味-指示的意味-本質意味」の三項図式もまた(「造形芸術作品の記述および内容解釈の問題」、1932)、近年ディディ・ユベルマンが論断したごとく、『純粹理性批判』の総合(Synthesis)概念の美学的変奏なのである。E・ゴンブリッチの「図式 (Schemata)」概念もまたしかり。

けだし「引いてみなければ線を考えることはできない、描いてみなければ円を考えることはできない」(B154)というカントの眩きは、芸術学の無意識を構成する。

ではシュマルゾウはどうか。晩年、E.カッシーラーについて「私同様、カントのコペルニクス的転回を出発点とした」と記すとき(『美学一般芸術学雑誌』、1929)、彼はカントへの傾倒を間接的ながら表明している。しかし彼はこう続ける。「人間精神は空中を浮遊せず、人間身体 (Menschenleib) の内部を生動する。芸術が発動するには人間身体の有機的組織以上を要しない」と。彼の転回は身体への転回だったのである。

注意深く見ると、『基礎概念』の原理的部分にはカント哲学からの逸脱の兆候がいくつも認められる。たとえばカントのカテゴリーと、シュマルゾウの基礎概念とでは、証明が異質である。前者がカテゴリーの「自己同一」を探求したのに対して、後者は基礎概念の「相互交差」を追求している(テーブル上で、シンメトリカルな図を描いた板を、下辺を固定して向こう側に徐々に倒すことで奥行きを導く思考実験など。)しかしこれでは「逸脱」の説明として不十分であり、分析の徹底が必要である。

カントに倣い「構想力による総合」を奉ずる美学が、そのまま、しかしカントに逆らって原理に「身体と運動」を追加装備したとき、その美学はどのような相貌を呈するのか。

同じ問いはこうも表現できる。1905年という早い時点で、シュマルゾウにおける「身体と運動」への哲学的転回は、いったいどんな「非カント的背景」のもとで可能だったのか。

彼が特異な芸術学に想到した経緯を明らかにするために、ライプニツ(G.W.Leibniz.1646-1716)と、ヘーゲル没後(1831)、プロイセンの哲学界を掌握したトレンデレンブルク (F.A.Trendelenburg.1802-1872) を採り上げる。